

## 劉大櫟の文論と八股文批評

浅井 邦昭

### はじめに

桐城派は清朝最大の文学流派として、当時の知識人社会に大きな影響力を有していた。その始祖とされる方苞は康熙から乾隆にかけて活躍し、その後を承けた劉大櫟を経て、姚鼐に至って、ようやくその師承が意識されるようになった。

しかしこれまでの研究では、桐城派が形成された背景を十分に明らかにしたとは言えない。方苞らの文学主張についても、三人がなぜ同一流派と目されるようになったかという問題は看過されている。特に方苞と劉大櫟については、文章および文学主張の隔たりは大きいとされ、その違いが強調されてきた。例えば「國史文苑傳」（『海峰文集』卷首）では、二人の文章について次のように言う。

大櫟 方苞の門に遊ぶと雖も、爲る所の文は造詣各おの殊にす。苞は蓋し義理を經より擇取し、文に得る所の者は義法なり。大櫟は古人の神氣音節に並りて之れを得。兼ねて莊騷左史韓柳歐蘇の長を集む。

方苞が「義法」を追求したのに対し、劉大櫟は「神氣音節」を強調した。この点について、「國史文苑傳」は二人の師弟関係を認めた上で、その違いに言及する。しかしその後の研究には、劉大櫟が方苞から影響をあまり受けなかったと指摘するものもある。その代表が姜書閣『桐城文派評述』（商務印書館 一九三〇年）である。姜氏は、彼

を桐城派に位置づけることについては否定しないものの、二人の関係について「劉氏は桐城派の正統ではあるが、しかしながら方苞について学問を受けたことはないし、その文もあまり似てはいない。」と、直接の師承を否定している。その他にも、二人が師弟関係を結んだのは、劉大櫟が自身の文学主張を確立してからのことであると研究<sup>2)</sup>者も多い。つまりこれまでは、彼が方苞から多くのことを学ばなかったために、二人の主張が異なるものとなったと考えられてきたのである。

しかし方苞は彼を「及門劉生」（『望溪先生集外文』卷十「與魏中丞（定國）」）と称しているし、劉大櫟も方道章（方苞の子）に対する祭文では「余 教へを先生より奉りてより、因りて以て交はりを君に得。獨り先生の余を視ること子の如くなるのみならず、君も亦た余を視ること弟鼻の如し（自余奉教於先生、而因以得交於君。不獨先生之視余如子、而君亦視余如弟鼻。）」（『海峰文集』卷八「祭方定思文」）と言っており、その弟子であることを自認している。したがって二人は確かに師弟関係を結んでいたと見なすことができよう。実際に、彼らは方苞の文学主張から大きな影響を受けていた。今回、筆者は二人の関係を示すものとして、八股文に注目する。彼の八股文は現在『劉海峰稿』としてまとめられているが、その目録には「方望溪吳荊山兩先生鑒定」と呉士玉とともに方苞の名が掲げられている。これは彼の八

股文が、方苞の影響下で執筆されたことを示すものである。そこで八股文を通じて、劉大櫪の文論がどのような環境から生み出されたのかを明らかにしたい。

桐城派と八股文の関係については、筆者は前稿「方苞の「義法」と八股文批評」（『日本中國學會報』第五十三集 二〇〇一年）において、方苞とその友人である戴名世の八股文集に注目し、そこに収録されている批評が、方苞の文学主張に大きな影響を与えたことを明らかにした。当時の知識人たちは、科挙及第を目指して八股文を多く執筆し、師や友人たちから作品の批評を受けていた。方苞もまた韓菼を中心とするグループに参加し、彼らとの交流を通じて「義法」を体系化している。つまり桐城派の始祖方苞においては、その文学主張は八股文と密接な関係を持っていたのである。

劉大櫪もまた知識人の一人として、当時のならいにしたがって八股文の執筆に励んでいる。その八股文については、方苞が「劉生大櫪は但だ時文に精らかなるのみならず、詩古文詞に即きても、眼中に罕に其の匹を見る（劉生大櫪不但精於時文、即詩古文詞、眼中罕見其匹）」（『望溪先生集外文』卷十「與雙學使（慶）」）と高く評価している。方苞はその詩や古文よりも先に八股文に言及しており、当時において、劉大櫪がまず八股文によって評価されていたことがわかる。しかしながら彼はついに科挙及第を果たすことができず、その人生の多くを八股文の執筆に費やした。したがって八股文への取り組みが、彼の文論に影響を及ぼしたのではないかと推測できる。そこでまず方苞および呉士玉との関係を踏まえながら、劉大櫪がどのような環境で八股文を執筆していたか見ておくことにする。

## 第一章 劉大櫪と八股文

劉大櫪、字は才甫、または耕南という。海峰と号した。彼は十四歳

から本格的に八股文を執筆しはじめ、二十代よりたびたび科挙を受験する。しかし結果は郷試副榜に二度挙げられたものの、ついに及第することはできなかった。また晩年に黟県教諭に着任しているため、彼は生涯を通じて、八股文とつながりを持ち続けていたと言える。ただし三十六歳以後は科挙に応募することを止めており、その創作活動の中心は三十代半ばまでと考えることができる。

彼は十四歳で最初の師である同郷の呉直に師事する。呉直については、劉開「呉先生直傳」（『碑傳集』卷一百四十）に詳しい。それによると、彼は郷里の名士である方苞の文章を意に介さなかったが、一方で方苞はその文章を高く評価したという。また彼は音律に通じ、四方に遊覽することを好んでいた。さらにその八股文についても、劉開は彼を劉大櫪や姚鼐の先駆と見なしている。

ただし劉大櫪は、呉直について多くを語っていない。さらに『劉海峰稿』は八股文批評を多く収録しているが、呉直のものは収録されていない。その批評は、劉大櫪が上京後に知り合った人物のものがほとんどであり、郷里において彼が呉直からどのような影響を受けたかは、うかがい知ることはできないのである。

彼に影響を与えたことが明らかになっているのは、呉士玉と方苞である。呉定「海峰先生墓誌銘」（『碑傳集』卷一百十二）によれば、「年二十九にして、舉に應じ京師に入る。巨公貴人、皆な其の文に驚駭するも、而れども尤も方侍郎暨び呉荊山閣學に賞せられ、以爲らく昌黎復び出づと（年二十九、應舉入京師。巨公貴人、皆驚駭其文、而尤見賞於方侍郎暨呉荊山閣學、以爲昌黎復出）」とあり、彼は上京前後に相次いで呉士玉、方苞の知遇を得たとされる。これ以後、彼は二人から多方面にわたる援助を受け、影響を受けていったのである。

呉士玉、字は荊山、江蘇呉県の人である。康熙四十五年（一七〇六）方苞と同時に会試に及第し、その後は礼部尚書まで至った。彼は諸生

のころより八股文によって天下に名を知られ、『欽定四書文』も彼の作品を収録する。また方苞と八股文を通じて交遊があり、劉大櫟の文集にも序を執筆している。<sup>三</sup>ここから彼は方苞師弟と文章を通じて、非常に親しい関係にあったと言えるのである。

呉士玉は、劉大櫟が初めて出会った名士であり、彼の紹介によって、その文名は京師へと伝わるようになる。その経緯について、呉士玉は次のように述べている。

去年の春、予 劉子畊南に旅舎に遇ひ、之れと語ること温然として以て和ぶ。其の胸中の藏を叩くに、浩然として度量を以て計るべからず。予固より劉子の尋常の人に非ざるを異とす。既にして其の爲る所の詩賦古文辭及び制舉業の文共に數十首を出だして、以て余に示す。之れを讀むに洋洋乎として、才力の縦恣たること、極まらざる所無し。而も經史を斟酌して、未だ嘗て一たびも矩矱の外に出でず。因りて之れと交はりを訂び、其の文を攜へて京師に至り、以て縉紳大夫に示せば、劉子の文を以て世俗の及ぶ所に非ずと爲さざる莫し。<sup>四</sup>（『海峰文集』巻首「海峰文集序」）

彼が劉大櫟と出会ったのは、康熙六十一年（一七二二）のこととされる。<sup>五</sup>この時、彼が受け取った作品には、八股文が含まれていた。ここには八股文が挙子たちの交遊を求める手段となっていたことが認められる。つまり二人の出会いには、八股文が大きな役割を果たしたと言えるのである。

呉士玉は彼の八股文の才能を認め、その上京後はさまざまな援助をしている。劉大櫟「祭呉文恪公文」（『海峰文集』巻八）では、その援助の具体例が示されている。それによれば、上京当時、彼は呉士玉の邸宅に寄宿して、生活の面倒を見てもらった。またその蔵書を存分に利用したことを、感謝の念を込めて回想している。この援助は、呉士玉の死まで約十年続き、その庇護の下で、彼は京師における名声を

高めていったのである。またこのころ彼は方苞の知遇も得ており、呉士玉とともに方苞からも援助を受けるようになっていく。

方苞は、康熙五十年（一七一）文字の獄に牽連したが、その文名の高さゆえに康熙帝によって死を免れ、その後は武英殿修書總裁に任命された。さらに雍正帝、乾隆帝からも重用され、官は禮部右侍郎にまで至っている。八股文においても『欽定四書文』などの編纂に主導的役割を果たしている。劉大櫟が方苞と出会ったのは、彼がまさにその地位を確立していく時期に当たっていた。

方苞は劉大櫟と出会い、韓愈や歐陽修に比して、その才能を高く評価した。その後まもなく劉大櫟は彼に師事したと考えられる。なぜならこれ以後、彼は呉士玉の後を承けて、劉大櫟にさまざまな便宜を図っていくようになるからである。

方苞はまず乾隆元年（一七三六）博学鴻詞科に劉大櫟を推薦するものの、その結果、彼は選に漏れている。そこで方苞は当時の高官にしばしば彼を紹介するようになる。例えば、乾隆十三年（一七四八）方苞はその弟子である江蘇学政の尹會一に、彼を楊黄在とともに幕僚として推薦している。ほかにも、方苞は魏定國や雙慶などに彼を推薦するために、先にあげた「與魏中丞（定國）」「與雙學使（慶）」などを執筆している。ここから社会的な援助を通して、二人が師弟として強く結びついていたことがわかるのである。

方苞師弟は、また八股文においても密接な関係を持っていた。先に述べたように『劉海峰稿』に鑑定を依頼したことは、劉大櫟が方苞の権威を十分に認識したことを示すものである。収録されている批評を見ても、方苞は二十一の作品に対して批評を加えており、その作品を見る機会が多かったことがわかる。さらに「徐笠山時文序」（『海峰文集』巻四）には、二人が八股文を通じて交流していたことを見ることのできる。それによれば「吾が友徐君笠山の文、吾嘗て望溪先生と之

れ論じ、以爲らく歩を古人に追ひ、而も世俗の文を爲らざる者なりと（吾友徐君笠山之文、吾嘗與望溪先生論之、以爲追歩古人、而不爲世俗之文者也。」）と言ひ、二人が徐廷槐の作品について論評している様子が描かれている。その友人について論じていることから、彼らはふだんから多くの作品を、ともに読み議論していたと考えられる。こうした論評を通じて、劉大櫟は師の文学主張に触れ、さらには共有していったのである。

当時の知識人は、八股文批評を通じて自身の文学主張を表明し、周囲もまた批評を通じてその主張を受容していた。『劉海峰稿』にも、その一端を見ることが出来る。例えば、方苞は「此の題の義法、此の文之れを得。望溪先生（此題義法、此文得之。望溪先生）」（『劉海峰稿』「陳司敗問一章」評）と、自身の批評概念である「義法」を劉大櫟に提示している。これまでは、劉大櫟が「義法」について言及した文章がないため、方苞から教えを受けたのか問題になってきた。しかしこの批評からは、彼が「義法」に触れる機会があったことが認められる。さらに方苞が解説なく使用していることから、その内容についても劉大櫟は十分に理解していたことがわかるのである。

方苞は劉大櫟と八股文を論評するだけでなく、さらに執筆を命じて指導することもあった。『劉海峰稿』「天下有道則一節」には、「望溪先生の此の題の文、自ら佳からずと謂ふ。云へらく曾て友人の爲に一篇を作るも、頗る前作に勝れり。其の稿比持この去られ、後に得べからずと。余に命じて此れを作らしむ。自記（望溪先生此題文、自謂不佳。云曾爲友人作一篇、頗勝前作。其稿比被持去、後不可得。命余作此。自記）」とあり、方苞は劉大櫟に八股文を執筆するよう命じている。彼はその才能を見込んだからこそ代作させたのであり、劉大櫟もまた師に代わって執筆することを榮譽と感じたからこそ、わざわざ書き留めたのであろう。このように方苞師弟には、八股文を通じて活発

な交流が見られる。したがって八股文は、二人にとって文学主張を交流する重要な場であったと言えるのである。

以上述べてきたように、劉大櫟は方苞からその主張を受け入れる環境にあったが、彼が接触したのは、方苞一人の主張に限っていない。方苞以外にも、彼は周囲から八股文批評を通して、さまざまな文学主張を受け入れていた。前稿で明らかにしたように、方苞は康熙年間に韓菼を指導者とするグループに所属し、彼らと八股文批評を通じて、その主張を交流させていた。劉大櫟もまた同じように、方苞をはじめ、周囲の人物たちとグループを形成して創作活動に励んでいたのである。

彼らの中心になっていたのは、やはり方苞であった。『劉海峰稿』には方苞の友人や弟子の批評が多く収録されている。その評者を見ると、「曹諤庭先生（一士）」「葉書山（西）」「官瑜卿（獻瑤）」「雷貫一（鉉）」「沈冠雲（彤）」「姚南青（範）」などは、劉聲木（桐城文學淵源考）が方苞の弟子と認定している。そのほかに「李穆堂先生（紱）」「徐笠山（廷槐）」「周白民（振采）」「郭昆甫（煒）」「全紹衣（祖望）」「楊黃在」らには、その友人や弟子として方苞と何らかのつながりが認められる。方苞は高官としてまた八股文の名手として、グループの指導的役割を果たしていた。ここから当時彼を中心とするグループが存在し、そこでは互いの作品に批評を加えていたことがわかる。劉大櫟はその一員として、周囲から八股文批評を受けていたのである。

このように彼は八股文批評を通じて、周囲の文学主張を受け入れる環境にあった。劉大櫟は彼らとの交流を通して、自身の文論を確立していったのである。彼の文論は現在「論文偶記」（『海峰文集』巻首）としてまとめられているが、その主張には、八股文から影響を受けたと思われるものが少なくない。そこで次に「論文偶記」と「時文論」（『劉海峰稿』巻首）を比較しながら、その文論における八股文の地位を明らかにする。

## 第二章 「論文偶記」と「時文論」

劉大櫪の文論については、これまで「論文偶記」を中心に論じられてきた。「論文偶記」は、文章に関する彼の平生の議論をまとめたものである。その内容は、文章を体系的に論じた部分と、「奇」「高」「遠」「簡」「疎」「変」「瘦」「華」など文章の評価基準を論じた部分の大きく二つに分かれる。前半部では、彼は「字句―音節―氣―神」という関係を提示し、文章執筆において、字句の追求から始まり、神を極めることまでを一つの過程としている。これは「神氣説」と呼ばれるが、その主張を端的に示すのが次の文章である。

行文の道は、神もて主と爲し、氣之れを輔く。曹子桓蘇子由の文を論ずるに、氣を以て主と爲すは、是れなり。然れども氣は神に隨ひて轉じ、神渾いなれば則ち氣は瀦く、神遠ければ則ち氣は逸れ、神偉んなれば則ち氣は高く、神變ずれば則ち氣は奇でて、神深ければ則ち氣は靜かなり。故に神は氣の主爲り。専ら理を以て主と爲すに至りては、則ち未だ其の妙を盡さず。(「論文偶記」)

彼は曹丕や蘇轍の氣を中心とする文論に言及しながら、その上位概念として神を設定する。彼はまた「神なる者は、文家の寶なり(神者、文家之寶)。(同上)とも言っており、文章を執筆する上で、神の獲得を最重要課題と位置づけた。さらに氣との関係については「神は只だ是れ氣の精なる處なるのみ(神只是氣之精處)。(同上)と言っており、氣の精妙な状態が神であるとしている。つまり神は氣と連続する存在として捉えられたのである。この「神氣」について、最も具体的に論じたのが、三石善吉「桐城派における氣―詩文論を中心として―」(『氣の思想』東京大学出版会 一九七八年所収)である。三石氏は「いわば「神」という測りがたいものを把握しうる概念に変換させる鍵概念が「氣」の概念にほかならない」とする。これは氣という具体的な概念を提示することで、神という靈妙な状態が、文章にお

いて表現可能になったことを評価したのである。

先の引用において、今一つ注意すべきは理の位置づけである。劉大櫪は理に拘泥して執筆すると、文章の妙味を尽くせないと説く。この引用に続いて、彼は工匠を例えとして「神氣音節」は作者の能力に属し、「義理書卷經濟」は執筆の材料としている。つまり作者の「神氣」を通して、はじめて理は文章に表現できるのである。「神氣」を作者に内在する能力とした一方で、理(＝義理)については「書卷」「經濟」とともに文章の対象とした点に、彼の「神氣説」の特徴があると言える。

ところで、これまでの論者が「論文偶記」を詳しく分析するのに対して、八股文を論じた「時文論」については、ほとんど注目されてこなかった。しかし八股文については、すでに劉大櫪以前より「古文を以て時文を爲る(以古文爲時文)」という古文の文章構成法によって、作品を執筆することが求められていた。そのため八股文についても、知識人たちは古文との関連性を強く意識していたのである。

劉大櫪は中でも特に八股文の重要性を認識していた。彼は「文章は、藝事の至精にして、而も八比の時文は、又た精の精なる者なり(文章者、藝事之至精、而八比之時文、又精之精者也)。(「徐笠山時文序)」と主張して、八股文が文章の精華であるとしている。そのため、多くの知識人が八股文をさげすむことに対しては、異議を唱えている。彼は「古文を談ずる者は、多く時文を蔑視す。此れも亦た古文の中の一體爲るべきを知らざればなり。要は功を用いること深く、世俗と轉移せざるに在り(談古文者、多蔑視時文。不知此亦可爲古文中之一體。要在用功深、不與世俗轉移)。(「時文論)」と言っており、八股文もまた古文の形態の一つであると位置づけている。つまり劉大櫪にとって、八股文は古文と統一的に論ずべき文章であったのである。したがって、彼の文論においても、古文は八股文と強い関連性が意識

されていた。本章で取りあげる「論文偶記」は古文について論じ、「時文論」は八股文について論じている。その対象は異なるものの、その主張には共通する部分を多く含み、文論として一つの体系を見出すことができる。そこで「論文偶記」と「時文論」を比較して、その新たな一面を明らかにしてみたい。

劉大魁の「神氣」については、これまで作者の精神活動に注目して論じられてきた。佐藤一郎氏は神を「靈感」と解釈した上で、「方苞の義法理論と比べて朱子学の正統を擁護するよりも、文人的な自由と個性を強調する傾向が強まるのである。」と、方苞との比較を通してその特徴を論じている。三石氏もまた「ある瞬間的なひらめきを具体的なイメージとして描きあげる心的過程」としており、両氏はいずれも「神氣説」が自己の精神を表現するためのものであると考えている。しかし劉大魁は自己の精神をそのまま文章に表現することを認めていたわけではない。彼は「神氣」の獲得方法について、次のように言う。

其の要は只だ古人の文字を読む時、便ち設りに此の身を以て古人に代はりて説話すに在り。一呑一吐、皆な彼に由りて我に由らず。爛熟して後、我の神氣、即ち古人の神氣にして、古人の音節、都て我が喉吻の間に在り。我が喉吻に合ふ者は、便ち是れ古人の神氣音節と相ひ似たる處なり。之れを久しうすれば、自然と鏗鏘は金石より發す。（論文偶記）

「由彼不由我」と言っているように、「神氣」は自己にそのまま内在するのではなく、古人に求めるべきものであった。したがって作者は古人の文章を熟読した上で、自己を古人の「神氣」と重ねあわせなければならぬ。そうしてはじめて「神氣」を獲得したと言えるのである。この議論からは、佐藤氏の言うような自由も個性も見出すことは難しい。むしろ劉大魁は、個性の自由な表現を抑制することを狙っ

ていたと言えるのである。

この古人に代わって文章を執筆するという主張には、八股文との共通点が見られる。なぜなら八股文の目的は、孔子をはじめとする聖人に代わって執筆することにあったからである。したがって、「論文偶記」と同様の主張は「時文論」でも見ることができ、彼は「時文論」においても、やはり神を重要な概念に位置づけている。

時文は聖賢の神理を摹繪し、而も神尤げ理より重し。作者は兼ね至るを以て上と爲す。神理より重ければ則ち神を寫すこと主と爲すも、而も理自ら至らざる無し。理神より重ければ則ち理を説くこと主と爲すも、而も神自ら合はざる無し。神を寫す者は宜しく少しく理を説くべし。神の礙るを恐るればなり。理を説く者は空しく神を寫すことを忌む。理を明らかにするを貴べばなり。彼は八股文を執筆する際には、聖賢の「神理」を描き出すことが必要であるとす。さらに「神理」については、神を理より重要と位置づける。この引用には、先人の神を獲得してから文章を執筆すべきとする点で、「論文偶記」と共通する議論が見られる。ただし、ここで「論文偶記」が「神氣」としたのに対し、「時文論」では「神理」と、神を気ではなく理とともに使用していることには注意が必要である。なぜならこの違いには、古文と八股文に対する劉大魁の認識が反映しているからである。

劉大魁は神を理より重要としながらも、両者は不可分であると考えた。これは「論文偶記」が、氣を神に至るための手段とするのとは異なる。先に見たように「論文偶記」では、理を文章の材料と考え、「神理」ということばは用いらなかった。一方、ここでは氣について触れていない。これは彼が八股文を特殊な文章であると認識していたからである。劉大魁は八股文を古文の一種と考えていたが、八股文の目的が、聖人の口吻によって義理を文章に敷衍することにあつたこ

とは、十分に顧慮していた。彼は「古文は只だ自己の精神の勝れるを要す。時文は己の精神と聖賢の精神とを相ひ湊合するを要す（古文只要自己精神勝。時文要己之精神與聖賢精神相湊合）」（同上）として、古文では自己の精神を演出するのを認めるのに対し、八股文が追求すべきは、聖人の精神であるとする。彼は八股文において、あくまでも自己を聖人の精神と統合することを要求したのである。なぜならここに言う「聖賢精神」には、「神気音節」といったその口吻を再現することと同時に、聖人の説く義理の解明も含まれているからである。聖人は絶対的な存在であり、八股文ではそのすべてを文章に再現しなければならぬ。そのため理もまた神とともに、文章の最終目標とされたのである。

一方、古文が追求すべきは自己の精神であった。古文においては、聖人のような絶対的な存在は設定されていない。これは古人の文章が、理を追求するものばかりではなかったことに基づく。だから彼は「論文偶記」において、「義理」を「書卷」「経済」とともに文章内容として位置づけたのである。その内容に絶対的な規範がない以上、作者が求めるべきは、字句音節からはじめるしかない。そこで彼は古人と合一することを前提としながらも、文章に自己の精神を演出することを認めた。この古人と重ね合わされた自己の精神が気であり神である。したがって、古文において気は神に到る前段階として位置づけられ、気から神への道筋が強調されたのである。

劉大櫟は、この「神気」「神理」の使い分けについて自覚的であった。「時文論」において、彼はこの両者を次のように位置づけている。

八比の時文は是れ聖賢に代はりて説話<sup>はな</sup>し、古人の神理を千載の上  
に追ふ。須らく是れ眞に逼るべし。聖賢の意の本と有る所、我之  
れを減じて無からしむを得ず。聖賢の意の本と無き所、我之れを  
増して有らしむを得ず。然れども又た訓詁の謂に非ず。左馬韓歐

的<sup>の</sup>神気音節を取りて、曲折 題<sup>した</sup>に與ひて相ひ赴けば、乃ち其の至  
れる者と爲す<sup>す</sup>。

彼は八股文をただの訓詁ではなく、「古人神理」「左馬韓歐的神気音節」の両者を表現すべきものとしている。ここでいう「古人」は先の引用とは異なり、聖賢を指す。彼は「神理」を追求すべき対象は聖人であると考えた。一方、「神気」の対象は、『左傳』『史記』および韓愈、歐陽修を代表とする唐宋の古文家である。これらの文章は、古文の模範とされてきた。ここから「聖賢―神理」「左馬韓歐―神気」という図式が導き出される。古文において、彼は「神理」に言及せず「神気」のみを論じた。これは古文では「左馬韓歐」の文章が模範とされたからである。一方、八股文では、聖人の精神を描き出す必要があるため、「神気」だけでは不十分であると考えた。そのため彼は「神理」を設定し、「神気」とともに作品に表現することを要求したのである。これは八股文が古文より一段高い文章として意識されていたことを示す。だからこそ、劉大櫟は「神理」「神気」を備える八股文を文章の精華と評したのである。

ここまで論じてきた内容から、劉大櫟の文論をまとめると、彼は文章全てにおいて神を最終目標として設定した。これは文章の靈妙な状態であり、そのまま神に至ることは難しい。そこで古文においては、字句、音節、気という段階を設定し、神へ至る道筋を明らかにした。一方、八股文においては、経書を熟読することで、理とともに神を獲得する方法を示している。彼はこの二つの方法を示すことで、古文と八股文を統一的に論じる体系を構築したのである。

以上、古文と八股文に注目して、劉大櫟の文論について論じてきた。八股文もまた彼の文論において重要な地位を占める以上、彼の作品に対する批評が、その文論に与えた影響を分析する必要がある。そこで以下、『劉海峰稿』の批評を取りあげながら、劉大櫟の文論との共通

点を探ることにする。

### 第三章 八股文批評との共通点

第一章で論じたように、劉大櫨は方苞をはじめ多くの人物から批評を受け、彼らの文学主張に触れる機会があった。『劉海峰稿』を見ると、彼らの活発な文学交流を見ることが出来る。『劉海峰稿』は、呉士玉が鑑定していることから、雍正十一年（一七三三）の彼の死以前にまとめられたと考えられる。一方、「論文偶記」「時文論」は劉大櫨の平生の議論をまとめていることから、その晩年に現在の形になったと推測される。したがって八股文批評と比較することで、彼が周囲からどのような影響を受けたのか見ることが出来るのである。

「神氣」は劉大櫨の文論において、中心となる概念である。ただしこのことは、八股文批評において広く見られ、劉大櫨だけが主張していたわけではない。その例を次にあげてみる。

以含蓄之筆、寫難盡之詞。得史記之神。雷貫一（含蓄の筆を以て、盡くし難きの詞を寫す。史記の神を得たり。雷貫一）（『劉海峰稿』「子曰泰伯 一節」評）

其理精寔、其詞老朴、其氣渾雄。全紹衣（其の理は精寔、其の詞は老朴、其の氣は渾雄なり。全紹衣）（『劉海峰稿』「子曰性相近也 二章」評）

（傍線は引用者による。以下同じ）

雷鉉は神を用い、全祖望は氣を用いて作品を批評している。雷鉉は方苞の弟子であり、全祖望もまた姻戚として、方苞との関係は密接であった。この二人の批評から、方苞の周辺では、神や氣が批評概念として共有されていたことがわかる。方苞のグループに止まらず、八股文では、作品を批評するのに「神氣」を使用することは一般的であった。したがって劉大櫨の文論は、八股文批評からなんらかの影響を受

けたことが予想されるのである。

その中でも、今回注目するのは、八股文批評で用いられている表現である。『劉海峰稿』には、作品ごとに何人かの批評が附されているが、これは評者が一堂に会して批評したとは考えられない。方苞や呉士玉の場合は、鑑定作業を通じて、その多くを批評したと考えられるが、それ以外の評者については、劉大櫨がその人物との交遊を通じて、折に触れて批評を受けたのであろう。ただしこれは評者間の文学主張に、何の関連もないことを意味しているのではない。現在残っていないものの、彼らもまた互いの作品を批評しあっていたはずであり、その基準や批評概念は共有していたはずである。実際『劉海峰稿』に収録されている批評には、共通する表現がしばしば用いられている。これは彼らがグループとしてほぼ同一の文学環境にいたことを示しているのである。その一例として、呉士玉の批評を取りあげ、ほかの評者と比較してみる。

瘦折而變態不窮、如風水相遭、如游絲獨裊晴空。奇文也。吳荊山先生（瘦折にして變態窮まらず、風水の相ひ遭ふが如く、游絲の獨り晴空に裊びくが如し。奇文なり。吳荊山先生）（『劉海峰稿』「衆惡之必察焉」評）

題之所有而文之變化以生風水相遭。自然之文、乃天下之至文也。寶東臯先生（題の有する所にして文の變化以て風水の相ひ遭ふを生ず。自然の文にして、乃ち天下の至文なり。寶東臯先生）（『劉海峰稿』「子畏於匡 一章」評）

一絲獨裊、百折千迴。周秦而後、無此奇文。蔡芳三（一絲獨り裊びき、百折千迴す。周秦より後、此の奇文無し。蔡芳三）（同上）  
呉士玉は「風水相遭」「游絲獨裊晴空」という表現を使用している。「風水相遭」は、風が水上を吹くことを言い、「游絲獨裊晴空」は、蜘蛛の糸が空にたなびくことを言う。いずれも自然現象からの比喩であ



り、作品が微妙な変化を見せることを喩えている。

一方、寶光篇、蔡寅斗の二人は、一つの作品に対して「風水相遭」「一絲獨裊」を使用している。これは二人の作品に対する批評観点が、ほぼ一致していることを示す。なぜなら呉士玉が文章の変化を示すために二つの比喩を使ったのに対し、ここでは二人が期せずして同じくその変化を喩えているからである。寶光篇は文章の変化について「風水相遭」の比喩を使用しているが、蔡寅斗は「一絲獨裊」を「百折千迴」とともに用いており、彼もまた文章の変化を喩えていることがわかる。さらに蔡寅斗の場合は、その作品を「奇文」と称賛する点についても、呉士玉と共通する。ここから彼らが批評する際には、表現や批評観点など文学的な共通基盤に立って、作品を論評していたことがわかる。つまり彼らはグループの中で、その主張を交流させながら、批評活動をしていたのである。劉大樞の文論も、こうした環境と無関係ではない。そこで「論文偶記」や「時文論」において、彼が受けた批評と共通する表現を見ていくことにする。

「論文偶記」に比べ、「時文論」は八股文の文論だけに、八股文批評と共通する表現が多く見られる。例えば、劉大樞は作品を執筆する際の注意点について次のように述べている。

時文を作るは、才情を使い得ず、議論を使い得ず、學問を使い得ず、並びに意思を使い得ず。只だ當日の神理如何なるかを看、看て定まるを得る時、却て韓歐の文を用い、題に如ひて之れに赴け。

#### 「時文論」

彼は八股文を執筆する際に、その才情に任せたり、議論や學問をひけらかしたり、自己の精神を示してはならないとした。執筆の目的は、あくまでも聖賢の「神理」を見定め、古文の文章構成法によって執筆することであったのである。これは前章で述べた劉大樞の八股文に対する基本姿勢であった。ところがこの議論については、八股文批評に

すでにほぼ同じものが見られる。

不以才情、不以學識、不以詞藻、不意思。無聲色臭味可尋、乃前輩大家最高境地。方篠坡（才情を以てせず、學識を以てせず、詞藻を以てせず、意思を以てせず。聲色臭味の尋ぬべき無くして、乃ち前輩大家の最高の境地なり。方篠坡）『劉海峰稿』「大學之道 全章」評

方篠坡は八股文執筆における注意点を説くが、劉大樞の主張と比較すると、その禁止している内容で「才情」「意思」が一致する。さらに「學問」が「學識」に、「議論」が「詞藻」に言い換えられている。これは明らかに「時文論」が方篠坡の批評を意識して執筆されたことを示している。ここから劉大樞もまたグループの一員として、周囲の文学主張から影響を受けていたことがわかるのである。

こうした八股文批評からの影響は、彼の文論において至る所にその痕跡が見られる。今一つその例をあげておく。劉大樞は「凡そ行文の多寡短長抑揚高下に、一定の律無くして、而も一定の妙有り。意を以て會すべくして、言を以て傳ふべからず（凡行文多寡短長抑揚高下、無一定之律、而有一定之妙。可以意會、不可以言傳。）」（論文偶記）と言い、文章を執筆する際には、一律の規律などは存在しないと主張した。八股文でも同様の主張は見られ、「時文の體裁、原と一定無し。要は題に肖るに在るのみ。散を整へて布置し、題に隨ひて結撰すれば、可なり（時文體裁、原無一定。要在肖題而已。整散布置、隨題結撰、可也。）」（時文論）と、八股文にも一律の規則はないとしている。これはおそらく当時の知識人が、文章の構成ばかり追求していたことを意識しているのであろう。彼はこうすれば良いという規則などは存在せず、作者は神をいかに文章に發揮すべきかに心を払うべきだと考えていたのである。

こうした当時の風潮に対する批判も、すでに八股文批評に見ること

ができる。それは陳伯思「詩云瞻彼淇澳 一節」評（『劉海峰稿』）である。ここでは次のように言う。

古人文無定體、隨時結撰、勿以少見而怪之。陳伯思（古人の文に定體無く、時に隨ひて結撰すれば、少しく見ゆるを以てして之れを怪しむこと勿れ。陳伯思）

陳伯思もまた八股文には定まったスタイルというものはなく、その時に相応しい文章を執筆することが必要であると説く。この批評は、劉大櫟の文論とほぼ同じ主旨で議論されている。しかもこの「隨時結撰」は、「時文論」でも「時」を「題」に書き換えて使用されている。ここから劉大櫟は、その表現も含めて陳伯思の批評から影響を受けたと考えられる。以上二つの例から、劉大櫟は「時文論」を執筆する際には、彼がこれまで受けてきた八股文批評を参考にして、文論として体系化したことがわかるのである。

「時文論」は八股文に関する文論であるため、その主張は八股文批評からの影響を受けやすいと言える。それでは「論文偶記」では、八股文批評から影響を受けたのだろうか。これについては、「時文論」ほどはっきりとその影響を見出すことは難しい。ただしその主張や表現には、やはり八股文批評からの影響が疑われるものがある。その一例を次にあげてみる。

「論文偶記」では、「奇」「高」をはじめとする文章の評価基準を論じている。これらの基準は、その多くが八股文批評にすでに見られるものであった。その中でも、「簡」については、八股文批評との共通点が見られる。その内容は「文は簡を貴ぶ。凡そ文は筆老なれば則ち簡、意真なれば則ち簡、辭切なれば則ち簡、理當たれば則ち簡、味淡ければ則ち簡、氣蘊れば則ち簡、品貴ければ則ち簡、神遠くして含藏して盡きざれば則ち簡たり。故に簡もて文章の盡境と爲す（文貴簡。凡文筆老則簡、意真則簡、辭切則簡、理當則簡、味淡則簡、氣蘊則簡、

品貴則簡、神遠而含藏不盡則簡。故簡爲文章盡境。）」というものであるが、これと類似するのが蔡寅斗の批評である。

愈真則愈淡、愈淡則愈簡。簡淡之中、神味高遠、作者之心、以爲世間眞會。讀書人種子不絶、直百世以俟知者而不惑耳。蔡芳三（愈いよ真なれば則ち愈いよ淡く、愈いよ淡ければ則ち愈いよ簡たり。簡淡の中、神味高遠たれば、作者の心、以て世間の眞會と爲る。讀書人の種子絶えざれば、直だ百世以て知る者を俟ちて惑はざるのみ。蔡芳三）（『劉海峰稿』「若聖與仁 一節」評）

「論文偶記」は「筆」から「神」に至るいくつかのレベルにおいて、文章の簡潔を追求している。一方、この批評は「真—淡—簡」と段階的に捉えられているものの、「論文偶記」の「意真則簡」「味淡則簡」と共通する表現を含んでいる。さらにこの批評は、文章は生前より評価されることを求めるべきではなく、後世に知られることを求めるべきであると主張する。これについては「論文偶記」でも「文字は只だ千百世の後一人兩人の知り得るを求むるのみ。竝時の人、人人知り得たるを求めず（文字只求千百世後一人兩人知得。不求竝時之人、人人知得。）」と言っており、劉大櫟も彼と共通する主張を持っている。つまり「論文偶記」では、そのまま八股文批評を取り込んで議論することはなかったものの、やはりその主張には、ふだん受けてきた批評を意識したのが見られるのである。

以上『劉海峰稿』に収録されている批評を分析し、劉大櫟の文論との共通点を明らかにした。その文論には、八股文批評と共通する主張や表現が見られることから、彼が周囲との交流を通して、自身の文論を確立していったことがわかる。しかしこれまでの議論では、方苞からの師承については、まだ明らかになっていない。第一章で述べたように、方苞は彼の師であり、八股文においても指導的立場にあった。方苞はまた八股文においても、乾隆四年（一七三九）『欽定四書文』

の編纂に携わった、当時の権威でもある。そこで次章では、方苞の八股文批評と比較することで、彼が劉大櫟の文論にどのような影響を与えたのか論じることにする。

#### 第四章 方苞からの影響

これまでの論考では、劉大櫟が「神氣」を中心とした文論を構築したため、方苞の「義法」とは、その隔たりが大きいとされてきた。ただし『劉海峰稿』では「於題之來路去路正面、俱得神得脉。望溪先生（題の來路去路正面に於いて、俱もに神を得て脉を得たり。望溪先生）（「子曰聽訟 二句」評）」というように、方苞もまた神を批評概念として用いている。さらに彼が中心的役割を果たした『欽定四書文』でも「以議論叙題、神氣安閒、意義曲盡、絶無經營之迹（議論を以て題を叙せば、神氣安閒として、意義曲盡に盡くし、絶えて經營の迹無し。）」（『欽定化治四書文』論語上「顧鼎臣 陳司敗問昭公知禮乎 一章」評）をはじめとして、「神氣」を繰り返し使用している。したがって彼もまた神や氣については、ある程度批評概念として意識していたことがわかる。そこで本章では『欽定四書文』の批評を取りあげ、方苞が「神氣」をどのように位置づけたのか分析し、劉大櫟に与えた影響について論じることにする。

方苞は『左傳』『史記』に範を求めた「義法」を主張した。ただし彼は「義法」を論じる際に「神氣」にほとんど言及していない。彼は「神氣」については、「義法」とは別に議論しており、両者は異なった体系に属している。これまで方苞については「義法」を中心に論じられてきたが、その氣についても論じたのが、前出の三石氏である。三石氏は「進四書文選表」凡例を取りあげ、方苞の氣に関する主張をまとめている。それによれば、方苞は氣を人の資質と捉え、文章の「清真」を求めるには正しい理が必要であり、「古雅」を求めるには正しい

い辞が必要であるが、理と辞とを全うするには氣が必要であると説いたことに注目する。三石氏の研究は、これまで注目されなかった方苞の氣を論じた点で、非常に重要な意味を持っているのである。

ここで注意すべきは、「進四書文選表」が八股文に関する議論であるという点である。方苞もまた八股文においては「神氣」を用いており、批評概念として認めていた。したがって八股文に関してのみ、氣を議論の対象とした可能性がある。彼は「禮闈示貢士」（『望溪先生集外文』巻八）でも「神氣」に言及したが、この文章も挙子のために執筆された、八股文に関する文章である。彼は「進四書文選表」と同じく「清」「真」「古雅」「言有物」の観点から、執筆に際しての注意点を示したが、そのうち「古雅」については、「必ず高く羣言を掲り、氣を鍊り神を取りて、而る後に能く古雅たり。然るに非ざれば則ち字句を琢雕するも、澀と爲り贅と爲り、剽と爲り駁と爲るのみ（必高挹羣言、鍊氣取神、而後能古雅。非然則琢雕字句、爲澀爲贅、爲剽爲駁而已矣。）」として、古人の文章を熟読した上で「神氣」を鍊る必要性を強調している。ここでいう「羣言」は、「進四書文選表」では「周秦盛漢唐宋大家之古文」となっている。つまり方苞は古文から「神氣」を獲得することを要求したことになる。これは劉大櫟の「神氣説」と共通する。劉大櫟もまた「神氣」は古文から獲得すべきと考えていた。ここに二人の主張に共通点が認められ、方苞が劉大櫟に与えた影響を認めることができるのである。

先に見たように、劉大櫟は神に至る二つの道筋を設定した。第一は、古文における氣の獲得を通して神に至る道筋であり、第二は、八股文における聖賢の精神と合一することによる「神理」の両得であった。この古文の氣、聖賢の理についても、方苞はすでに八股文批評の中で言及している。

古文を以て時文を爲るは、唐荆川より始まり、而して歸震川又た

之れを愜まかんにして以て闕肆す。此等の文の如きは、實に能く韓歐の氣を以て程朱の理に達し、而も當年の語意に脗合し、縦横に排盪して、其の自然に任す。後に作者有るも及ぶべからざるなり。<sup>十三</sup>

（『欽定正嘉四書文』論語上「歸有光 吾十有五而志于學 一章」評）

方苞は歸有光の文を「韓歐」から氣を獲得し、「程朱」の理に到達したことを評価した。ここでの氣と理に対する理解は、「時文論」における劉大樞の基本姿勢とほぼ同じである。異なるのは、神に言及していない点だけである。劉大樞は、理と氣とを統括する上位概念として神を設定した。一方、ここでは氣と理の関係を明らかにしておらず、両者と神との関係もはっきりしていない。方苞の批評では「神氣」「神理」の萌芽は見られるものの、その関係についてはまだ明言できなかったのである。

それでは『欽定四書文』では、「神氣」をどのように位置づけているのであろうか。これについて、方苞は「義法」と対比しながら論じている。

法は義より起き、氣は神を以て行はる、指は物と化して心を以て稽とめざるの樂しみ有り。歸唐皆な古文を以て世に名だたるを欲する者なれば、其の古の作者を視ること未だ便ち遽かに斷語を爲さず。而れども時文に於いては則ち此れを用いること巽然として其の類より出づ。<sup>十四</sup>（『欽定正嘉四書文』大學「唐順之 此之謂絜矩之道 合下十六節」）

ここで方苞は『莊子』「達生篇」のことは使いながら、「義法」「神氣」の二つの批評概念を論じている。「義法」と対比していることから、「神氣」は「義法」に含まれない範疇であったことがわかる。さらに彼は「義法」について、「義」を「法」に先行する存在であるとしている。これは方苞が「義」を「法」の上位概念として位置づけ

ようとしたことを意味する。そこで「義法」における関係を「神氣」に当てはめると、彼は「氣以神行」と言っており、神は氣の上位概念とされていたことがわかる。つまり神は氣を通して文章に表現可能となるのである。この方苞の主張は、劉大樞の文論と共通しており、「神氣説」の先駆と見なすことができよう。『欽定四書文』における方苞の「神氣」は、後の「論文偶記」ほど体系的な姿を持つことはできなかった。しかしその主張には、確かに劉大樞へつながる要素を備えていた。つまり劉大樞は師の主張を發展させたのであり、二人はその文論においても、密接な関係を持っていたと言えるのである。

以上、『欽定四書文』の批評を見ながら、劉大樞の文論との比較をおこなった。方苞は「義法」を議論する際に、「神氣」について言及することはなかった。これは彼が「神氣」に注意しなかったわけではなく、あくまでその体系に組み込むことがなかったにすぎない。劉大樞の「神氣説」は、師が体系化しなかった部分を補完するものとして主張されたのであり、したがって二人の間に明らかな師承を認めることができよう。方苞は『欽定四書文』を編纂することによって、八股文の權威としての地位を確固たるものとした。劉大樞は、彼とその周辺人物との交遊を通じて、「神氣説」を体系化するに至っている。この八股文における方苞師弟の師承こそが、後に桐城派が形成される礎となったと考えられるのである。

#### おわりに

これまで劉大樞の文論について、八股文との関わりに注目して論じてきた。「論文偶記」については、これまで研究者に注目されてきたが、「時文論」を併せて見ることで、彼が神を中心とする、古文と八股文の統一の体系を構築しようとしたことが明らかとなった。さらにその文論は、彼が受けた八股文批評から影響を受けている。現在でも、

八股文についてその研究は十分におこなわれていない。ただし八股文は、清朝の知識人が最も熱心に取り組んだ文章である以上、その文学史における重要性を無視することはできない。桐城派においても、始祖方苞が八股文の名手であったこともあり、その重要性は十分に認識されるべきものであろう。

また方苞が劉大櫟に与えた影響についても、今後さらに研究が必要である。これまでは、姚鼐に至ってその師承が意識されるようになってきたため、彼が恣意的に同郷の二人を結びつけたと考えられてきた。ただし姚鼐の主張が広く受け入れられたのは、当時の知識人がその系譜を妥当であると認めたからである。それは方苞が劉大櫟の八股文を鑑定したことが大きかったであろうし、また『欽定四書文』などに見られる方苞の八股文批評を、劉大櫟の文論でうまく説明できたことにもあっただろう。これまでは二人の古文だけが注目されてきたが、その交遊や社会的な位置づけも含めて、これからは多角的な視野が要求されるのである。劉大櫟以後、桐城派の作者たちが八股文とどのように関わり、その文学主張をどのように発展していったのかについては、今後の課題としたい。

一 大櫟雖遊方苞之門、所爲文造詣各殊。苞蓋擇取義理於經、所得於文者義法。大櫟並古人神氣音節得之。兼集莊騷左史韓柳歐蘇之長。

今回引用するテキストについては、『海峰詩集』十一卷、『海峰文集』八卷、『劉海峰稿』不分卷（同治十三年光緒元年裔孫繼刊本）に基づく。

二 鄒國平、王鎮遠『清代文學批評史』（上海古籍出版社 一九九五年）は、劉大櫟がはじめに呉直に師事したことに注目し、呉直が方苞と異なる文風であったことから、その弟子である劉大櫟も、方苞とは学問や思想に隔たりがあるとす。また佐藤一郎「劉大櫟の評価をめぐって」（『江南の士大夫文学』近代文藝社 一九九四年所収）では、魏際昌「桐城古文学派小史」

（河北教育出版社 一九八八年）を引用しながら、彼が自己の文学を完成してから、方苞の知遇を得たとしている。

三 管見によれば、『重訂方望溪全稿』には、呉士玉の八股文批評が二条存在する。

四 去年春、予遇劉子畊南於旅舍、與之語温然以和。叩其胸中之藏、浩然不可以度量計。予固異劉子非尋常人。既而出其所爲詩賦古文辭及制舉業之文共數十首、以示余。讀之洋洋乎、才力之縱恣、無所不極。而斟酌經史、未嘗一出於矩矱之外。因與之訂交、攜其文至京師、以示縉紳大夫、莫不以劉子之文爲非世俗所及。

五 孟醒仁『桐城派三祖年譜』（安徽大学出版社 二〇〇三年）による。

六 行文之道、神爲主、氣輔之。曹子桓蘇子由論文、以氣爲主、是矣。然氣隨神轉、神渾則氣灑、神遠則氣逸、神偉則氣高、神變則氣奇、神深則氣靜。故神爲氣之主。至專以理爲主、則未盡其妙。

七 前出論文

八 其要只在讀古人文時、便設以此身代古人說話。一吞一吐、皆由彼而不由我。爛熟後、我之神氣、即古人之神氣、古人之音節、都在我喉吻間。合我喉吻者、便是與古人神氣音節相似處。久之、自然鏗鏘發金石。

九 時文摹繪聖賢神理、而神尤重於理。作者以兼至爲上。神重於理則寫神爲主、而理自無不至。理重於神則說理爲主、而神自無不合。寫神者宜少說理。恐礙神也。說理者忌空寫神。貴明理也。

十 八比時文是代聖賢說話、追古人神理於千載之上。須是逼真。聖賢意所本有、我不得減之使無。聖賢意所本無、我不得增之使有。然又非訓詁之謂。取左馬韓歐的神氣音節、曲折與題相赴、乃爲其至者。

十一 作時文、使不得才情、使不得議論、使不得學問、並使不得意志。只看當日神理如何、看得定時、却用韓歐之文、如題赴之。

十二 『欽定四書文』は、方苞が校閲官として、編纂に中心的な役割を果たした。またその批評は多く「義法」が用いられていることから、彼の基準

に基づくことがわかる。したがって本稿では、収録されている批評を、方苞の文学主張を反映したものととして扱う。

十三 以古文爲時文、自唐荆川始、而歸震川又恢之以閎肆。如此等文、實能以韓歐之氣達程朱之理、而脗合於當年之語意、縱橫排盪、任其自然。後有作者不可及也。

十四 法由義起、氣以神行、有指與物化而不以心稽之樂。歸唐皆欲以古文名世者、其視古作者未便遽爲斷語。而於時文則用此巋然而出其類矣。